
君がいる場所、僕が帰る場所

優女

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君がいる場所、僕が帰る場所

【Nコード】

N2362R

【作者名】

優女

【あらすじ】

”僕が見て来た世界は綺麗すぎたんだ。”浅宮直紀25歳。北里幼稚園の先生を勤めていたある雨の日にあつた出会いが彼を…。

プロローグ

僕は世界がこんなに綺麗だなんて一度も思ったことはない。

思ったところで何になる？

今までだって、空を見なかった。

僕が見て来た世界は、綺麗すぎたんだと思う。

綺麗すぎるほど、汚れた時の衝撃は大きい。

僕は一度として、君を汚したいなんて思わない。傷つけたくない。
だって君は”ワレモノ”だから。いつも僕が包んであげないと、い
つ割れるか分からない。

僕はそれが怖くて…いつもいつも怯えていた。

25年間、

僕は何を見てきたのだろうか…。

第1話

浅宮直紀25歳。

仕事は幼稚園の先生。

子供が好きだからこの仕事を選んだ。

子供といると、不思議と純粋な気持ちになることが多い。この世界の、嫌な事件や出来事が嘘のようだ。まるで何も知らないかのように。知らない方がいいことはたくさんある。

「直紀先生、これあげる！」

手渡されたのは折り紙のチューリップ。

「ありがとう、ゆきちゃん」

少女は満面の笑みをした後、駆けていった。

こういう平凡な日々がとても幸せだと思う。特に何も求めない、不快もない…。

「そろそろ教室に戻ってくださいー！帰りの準備をしますよー！」

「「「はい！」」」

僕のクラスのたんば組の子供たちが集まってくる。毎日の繰り返しだが、やっぱり子供の素直さに落ち着く。

しばらくして、迎えのお母さん達がやって来た。

「直紀先生、今度…お茶でもどうです？ ゆうたのお塾について少し相談が…」

「なーに、ゆうた君ママ！ 独り占めはよくないわ！ ねっ直紀先生」

「落ち着いてください！」

いつもの光景だ。

自分がそれなりにイケてるなんて思わないけど、若い男性の先生はママさんに好かれる。

これが1日の中で最も疲れる。

「先生、さよーなら！」

「さようなら！」

園児全員を帰した後だった。雨が降ってきた。

窓を閉めようとした時だった。

「…？」

しとしとと雨の降る中、その人はいた。

傘もささず、肩下くらいの髪は濡れ、白いワンピースを着ていた。
春で気温は高いが、あのままでは風邪をひいてしまう。

僕は傘をさし、外に出た。

「あの…風邪、ひきますよ？」

彼女ははっとこっちを見た。歳は20代前半くらいだろうか。

「すみません」

僕は傘を差し出した。

「よかったら…この傘、どうぞ」

彼女は拒んだ。

「大丈夫です！すみません、心配をかけて…」

「風邪ひきます！だからっ…」

僕は思わず強引に傘を渡してしまった。

「ありがとうございます…」

彼女は頭を軽く下げた。そのまま駆け足で去っていった。僕は彼女の背中を見つめた。
分からないけど…

何かを感じた。

懐かしくて

温かい…。

でも僕にはほど遠かった。

第2話

翌朝、いつも通り通勤すると昨日の彼女が幼稚園の玄関前に立っていた。カジュアルな服装がよく似合う。

手には昨日の傘を持っていた。

彼女は僕を見つけるなり小走りで駆けてきた。

「昨日は…ありがとうございました。コレ、返しておきますね」

綺麗に巻かれた傘を渡された。

「あ…うん」

いつの間にか彼女に見とれていた。

「…何か？」

はっとした。

「あついえっ…」

彼女は微笑んだ。

初対面なのに、どうしてこう恥ずかしくなるのだろうか…。

「男の人なのに幼稚園の先生って…素敵ですよ。あたしも幼稚園の先生になりたいかったなって冗談です。じゃあこれで」

軽く会釈した後、彼女は去って行った。
綺麗に巻かれた傘はまるで自分の傘のようではなかった。

職員室――

「直紀先生、おはようございます」

「あ……おはようございます」

ゆり組の沢時あい先生。僕の後輩である。

「何かあったんですかー？朝からぼーっとしちゃって」

「なんもないって」

「やっぱり、沢時先生と浅宮先生はデキてるんですか？」

首を突っ込んできたのは園長の真嶋先生。

「はアーやっぱり若くてイケメンってのはいいなあ。先生も昔は浅宮先生よりはイケメンだったな」

僕はため息をついた。

慣れの証拠かもしれない。

「疲れてるんですか？浅宮先生」

沢時先生が後を追ってきた。

「ん、別に……」

「なんかあったら、いつでも相談してくださいね!」

「ああ、わかった」

軽く言っただけど実際にはどうだろうか。後輩に悩みを相談するなんて先輩としてのプライドが廃るような気がして……沢時先生には悪いけど。

第3話

一度会っただけなのに、なんでずっと頭にいるのだろうか。

園児と遊ぶ事を忘れて彼女の事が頭を過ぎる。

「先生？どーしたの？」

「あつ、なんでもないよ。向こうで遊ぼうか」

「うん!!」

園児たちが僕の手を引っ張ってくれる。

彼女の事は… 忘れた方がいいかもしれない。

園児たちが帰った後、いつも通り掃除をしていた。窓に目をやったが、当たり前だ。もう彼女はそこにはいない。

何考えているんだと、恥ずかしくなった。

好きとかそういう感情じゃない。

よく分からないけど…僕はまた彼女と会う予感がした。

雨が降ったら、会えるかもしれない。

職員室でシャーペンをクルクル回していた。

「浅宮先生、何かお悩みでも？」

真嶋先生がお茶を出してくれた。

「ありがとうございます…」

ちょうどその時、大荷物を抱えた沢時先生が廊下を歩いているのが見えた。

「あつ、僕も手伝います！」

急いで沢時先生の元へ向かった。今の状況からの言い逃れかもしれない。

「大丈夫？俺が持つから」

「…本当に浅宮先生は優しいですね。園児にはもちろん、お母さん方にも人気ありますから」

「え？そ、そうかな…」

僕は荷物を抱え、スタスタと歩いた。
考えたこともなかった。自分の性格なんて。だから周りの言ってる
ことをただ鵜呑みにしているだけだ。爽やかとか、優しいとか…自
分じゃ意外にも分からないものだ。

だけどそう言われるとやっぱり照れる。

「褒められて、照れてるんですか？」

「そ、そんなんじゃないし…」

「浅宮先生カワイーっ」

スキップして行ってしまった。
おちよくってんのか？

女は怖い。すぐに見抜かれる。

荷物のダンボールには”衣装”と書かれていた。

もうすぐお遊戯会か…

第4話

「今日も雨ですね」

職員室から雨が降っている窓を眺めていた。

ジメジメしていて、洗濯物も乾きにくくて、いいことは何一つない。

「アレ？あの人…さっきからここにいない？」

沢時先生が窓の外を指差した。

もしかして…。

僕は勝手に外に出た。

いたんだ。

あの人…。

「ここに来ると思ったら…また会えると思って」

優しく笑う彼女に、僕は少し下を向いてしまった。

「…俺に、会いに来てくれたんですか？」

「当たり前です」

何言ってんだよ自分。

焦ってるのか？緊張しているのか？

彼女は少し嘲る。

「この間のお礼がしたくて。雨が降ってる時の方があたしのこと思
い出してくれるかなって」

「お礼なんて…」

ますます焦る。

どうしていいのかわからず、あたふたしてしまう。

「浅宮莉恵子と言います。はい」

そう言っただけ名刺を出した。奇遇なことに、僕と名字が同じだった。

「教師、やってるんです。高校の」

名刺の裏にはアドレスが書いてあった。目を見開いてしまった。慌
てて自分の名刺を取り出す。

「浅宮…直紀です」

「名字一緒ですね！驚いたー」

浅宮さんはなんか嬉しそうだった。僕と名字が同じだから？

「あ、っ、アドレス…」

急いで彼女に渡した名刺の裏に自分のアドレスを書いた。

「他人にアドレス教えちゃうなんて、あたしそんなことしないんですけど…あの日、あなたの姿見てから不思議と他人に思えなくなーんで、普通じゃありえないんですけど」

「いやっ、そんなことないですよ…」

「どうしてですか？」

それでも彼女は笑っていた。いや、にこにこしているって言うたらいいのかな。

「なんでかな…」

手を頭にやる。髪を触ったりして何かごまかすフリをする。

「お礼なんですけど」

「お礼なんてとんでもない…」

少し躊躇した後、彼女は切り出した。

「じゃあ、今度食事でも」

にこにこしていた顔がさらに増した。

僕は彼女の誘いに乗った。

浅宮莉恵子――。

僕も不思議と彼女を他人と思えなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2362r/>

君がいる場所、僕が帰る場所

2011年3月19日13時09分発行